

## < 書 評 >

### 自民族中心主義における人種の差異

エドワード・ダットン

Arktos, 2019

書評者：アルドリック・ハマ

西欧では、大量銃撃事件が起こり、あるいは移民制限に賛成する世論が強くなったりしている。西欧のエリート知識階層の一部では、このような民主国家の根幹を脅かす諸悪の根源は「白人ヨーロッパ人種差別主義」であると強調する人々が増えている。それに対して、あまり知的でない普通の人々の間では、このような害悪は移民の過剰な受け入れに起因すると考える人が多い。「白人ヨーロッパ人種差別主義」に原因を求める人々は、このような偏見を持つのはヨーロッパ人だけであるから、社会問題を解決する方法は、「白人ヨーロッパ人種差別主義」を根絶することだと考えているわけだ。オピニオンリーダーたちは、ヨーロッパの人種差別主義を疫病のように弾劾し、同時に「白人ヨーロッパ人種差別主義」を根絶するために様々な方策を提案している。その中には、非ヨーロッパ人の移民を大量に受け入れることも含まれている。ヨーロッパ人でなければ人種差別などするはずがないとかれらから我々は聞かされている。西欧民主主義国の人種的・文化的な構成を変えれば、最後には正義に合致した平等な社会が達成されるだろうと主張されることもある。多民族・多文化の国家を、どのようにすれば一体となった民主国家へと統合できるかについては、決して詳細には説明がされてはいないし、マイナーな問題視されている。本書では、人種差別とは、基本的には大昔の部族間戦争の流れの中から進化してきた生存戦略が現代風に表現されたものであると仮定されている。そうであるとすれば、世界中から人間を寄せ集めてきて一緒にした国家の場合には、おそらく人種差別主義的な行動と多数の人種間の抗争が劇的に増加する結果となろう。そして、おのおのの人種が、社会政治的・経済的な縄張りを確立して、これを防衛し拡大することに腐心するようになるだろう。

フリーランスのライターであり、研究者でもあるエドワード・ダットンは、従来「グループ内での忠誠」「グループ間の偏見」と呼ばれてきたものについて解説をしている。<sup>1</sup>ダットンは、本書の中では、「人種差別主義」というような政治

---

<sup>1</sup> A. マグレガー(1986) Race, Evolution, Creative Intelligence and Inter-group Competition. Washington, DC: Scott-Townsend Publishers.

的に色の付いた用語を使うことを避けている。しかし、彼は、自民族中心主義について社会学者たちが打ち立てた理論が不毛であると指摘する際には、彼らが作った政治的に色の付いた用語を使っている。二十世紀初頭の経済学者ウィリアム・サムナーは、自民族中心主義を定義しているが、それをダットンが本書の実際的定義として使っている。つまり、「(自民族中心主義とは) 自分の属するグループこそがすべてのグループの中心に存在しており、他のグループはすべて、自分の属するグループとの位置関係で評価判断される」という「世界観」である。この定義はさらに進んで、どのグループも「自分たちこそが優れた存在だと誇っている」と述べている。しかし、優越感や劣等感もまた各グループの基準によって、相対的に決まることになる。ダットンの本書は、グループの「世界観」が進化してきた様子と理由とを綿密に検討している。

一般には自民族中心主義はグループ内の協力とグループ外の人々への敵意であると解釈されている。ダットンもその範に倣って、自民族中心主義を二つに分け、グループ内の協力をポジティブなもの、グループ外への敵意をネガティブなものであると説明している。この説明によると、「ポジティブな自民族中心主義」は「自分の属する民族グループや自国に誇りを持ち、そのためになら犠牲になることを厭わない」ものであり、一方、「ネガティブな自民族中心主義」は「他の民族グループの構成員に対して偏見を持ち、あるいは敵対的になる」ものだという事である。ダットンは、個人もグループも、たとえば、ポジティブな自民族中心主義には熱狂するが、ネガティブな自民族中心主義は醒めた目で眺めていると主張し、それを実証している。ダットンが言うには、この二つの特質は、必ずしも関連しているものではなく、したがって、別個のメカニズムから出てきている可能性があるとのこと。

気を付けなければいけないことは、ネガティブな自民族中心主義とポジティブな自民族中心主義を、善悪の問題をさしはさまずに識別することが可能だということだ——そもそも人間の特質というものを自然が判断する場合には、道徳性などというものはその基準にはならないのである。特質がグループレベルでポジティブであるか否かを決めるのは、最終的にはその特質を持つグループが、持たないグループに対抗して存続することを可能にしてくれるかどうかである。善悪の問題とはせずに自民族中心主義を、グループの進化戦略という観点から説明することも可能であろう。外部グループとの競合(ダットンの「ネガティブな自民族中心主義」とグループ内での協力(ダットンのポジティブな自民族中心主義)との対立という観点である。自民族中心主義とは、厳密に言えば、限界があるニッチのなかで、一つのグループが他のグループに対抗して、生き残り、存続して行くことを確実にしてくれる進化的行動である。船が難破した場合を考えてみよう。救命ボートの数は限られている。他人を乗せてやるよりも、

まずは近親者や知人を優先しなければならない。そんなときにどうするかという問題である。<sup>2</sup>それはあんまり残酷だと思うかも知れないが、他の見知らぬ乗客たちも、自分の親族や友人を優先して、こちら側の人間を犠牲にするつもりなのだ。このような行為は、グループの人々が遺伝的に自分と繋がっている場合には、自分の遺伝子保存のために大いに役立つことになる。だからこそ、自民族中心主義がまず最初に進化したのである。もちろん、遺伝的なつながりというものは、小さなグループや部族の場合には緊密である。人類の進化の歴史において、だいたいはこのつながりが一番重要なものだった。ところが、これを現代の民族国家に当てはめようとする、自民族中心主義が生物学的に正しいのかどうかという疑問が生じて来る。特に、多民族国家の場合は深刻だ。多民族国家と言っても、始めからそうだった場合もあれば、移民を受け入れた結果そうってしまった国もあるのだが。

ダットンは、自民族中心主義における人種的差異の具体的な例を挙げている——それは二〇一五年、アラブの難民がヨーロッパへの移住した時の話である。西ヨーロッパは、最初のうちは、人種的・文化的に異質な彼らが殺到するのを受け入れた。ところが、東ヨーロッパは国境を閉鎖した。そこで、ダットンは、社会的な態度というものを国別の調査に基づいて分析してみせる。すなわち、ヨーロッパの人種グループの内部でさえ、自民族中心主義のレベルに差があり、西ヨーロッパでは、ポジティブな自民族中心主義にもネガティブな自民族中心主義にも関心が薄く、逆に東ヨーロッパではどちらにも関心が高いというのである。また、ダットンの分析によれば、すでに西ヨーロッパに定住したアラブ人は団結力が固く、もともからいる西ヨーロッパ人と比較するとポジティブな自民族中心主義が強い。ダットンはさらに進んで、調査から得られた統計を元にこう結論付ける。つまり、ヨーロッパ人は全般に、ポジティブな自民族中心主義にもネガティブな自民族中心主義にも意識が低く、それに対して、アラブ人と東アジア人はどちらのタイプの自民族中心主義にも意識が高いというのである。面白いことに、これまた国別の調査によると、アフリカ人は、歴史の古さや遺伝的多様性に関しては世界一と言っているほどなのに、自民族中心主義に関してはヨーロッ

---

<sup>2</sup> J.P. ラシュトンが提唱し、本書で詳述されている遺伝子相似説 (Genetic Similarity Theory) は、人間は自分に似た人間に生来好意を持つように進化して来たと言主張する。特に、自分と同じ遺伝子を持つ人間に引きつけられる。最終的には、当該の遺伝子を増殖させたいという目的を持っているからである。Genet 遺伝子相似説によると、人間は生来のメカニズムに規定されて、配偶者や同盟者を決めるというのである。そのようにして選んだ相手は、性格的にも肉体的にも自分に似た存在である。しかも、自分の持つ限られた資源をどのように分配するかを決めるのもこのメカニズムによるのだという。

パ人と同じ程度に無関心だというのである。

しかし、World Values Survey (WVS／「世界価値調査」／オランダに本拠のある調査機関／五年ごとに調査が行われる)の調査結果を見ると興味深いことが分かるが、ダットンが指摘するように、自民族中心主義の実態を完全に把握するためには、もっと精密な資料が必要である。現に、WVSの調査項目は、本書の言う自民族中心主義の定義を完全には反映していない。この調査への回答は、大衆文化およびポリティカル・コレクトな反応を反映しており、(自民族中心主義が顕現する国もあれば、それを抑制しようとする国もある)、国ごとに特有な性向はあまり見られない。たとえば、ダットンは、西欧諸国は東欧諸国に比べると、自民族中心主義が強くないと示唆しており、それも2015年のアラブ人の大量移民の年よりもずっと前から始まり、その後にも及んでいると述べる。しかし、2015年以後、中道右派の西欧諸国は、自民族中心主義の勢力に支持されて、制限的な移民政策を採用するようになった。<sup>3</sup>経済的なリベラリズム、IQまたは共産党支配の歴史などが、東欧の自民族中心主義とかがわりがあるのかどうかはまだよく分からない。

ダットンが指摘するのは、2015年にアラブ人の大移民が起った際、中東諸国の大半は、アラブの難民に対して国境を閉鎖したという事実である。難民たちは、ヨーロッパに比べれば、遺伝的にも文化的にも中東諸国と近縁なのだから、理解に苦しむ所である。本書でも若干触れられているが、中東諸国が国境を閉鎖したのは、条件反射的な反応ではなく、セキュリティが危うくなるからという理由だったのではないかと思われる。

また、サハラ以南のアフリカ人はヨーロッパ人に比べると、ネガティブな自民族中心主義には染まっていないと通常は仮定されている。それはそれで興味深いことであるのだが、ここでまた、WVSの調査結果に基づいて考えてみると、納得できないものがある。21世紀に入ってから、ひっきりなしに部族間抗争が勃発しているということは、この仮定に対する反証になっているように思われる。ダットンは、他の特質、たとえば知性が低いこと、宗教に夢中になりやすいこと、などがネガティブな自民族中心主義と結びついていると指摘する。

人によっては、自民族中心主義の生物学的な基盤を研究した所で、どんな意味があるのかと疑念を抱くこともあろう。ダットンの自民族中心主義に関する仮定は、2015年の移民危機に対する各人種グループの多様な反応を理解するために役立つはずだ。同様に、米国人の読者なら、米国内の諸民族が信奉している移民政策の多様性に気づくことであろう。中には、自分の属するグループの利

---

<sup>3</sup> <https://www.washingtonpost.com/news/worldviews/wp/2018/07/03/what-you-need-to-know-about-germanys-immigration-crisis/>

害よりも、他の人種グループの利害を優先する人々さえいる。ダットンの自民族中心主義に関する仮定が当たっているものなら、さらに進めて、たとえば、ヨーロッパ人は遺伝的にも文化的にも自分たちとは縁の遠い人々に、なぜこんなに唯々諾々と、限られた資源を提供してしまうのかを解明するためにも応用することができそうだ。<sup>4</sup>自民族中心主義の生物学的基盤などの行動上の特質を理解しなければ、外国人にも自国民にも恩恵をもたらさずの万能薬のような福祉政策は、世論から受け入れられずに失敗に終わってしまうことになる。その果ては、自民族中心主義と戦うか、外国人と戦うかという、恐怖の二者択一を迫られることになる。この恐怖の選択に関して、国論が分かれた場合には、ポストモダンの社会は分裂状態に追い込まれる可能性がある。だからこそ、自民族中心主義の生物学的基盤を研究する価値があるというわけだ。

本書が提起するのは、自民族中心主義に関する生物学的な基盤にもとづいた仮説であり、なるほどと首肯されるものである。本書は物事を考える際の、さまざまな絡み合った要素を追求する。それはたとえば、遺伝的差異に基づいた人種の定義であり、また、自然淘汰に基づいた人類の進化であり、親族関係であり、生活史戦略の緩急であり、性格分類である。自民族中心主義は現在問題になっている重要な特質であるが、他の心理的特質、たとえば知性のようなものを理解するために、ダットンの考え方を応用することも可能かも知れない。現にダットンは知性というものを、自民族中心主義の場合と同じ手法で探求している。さまざまな絡み合った要素を解明しようとする一例として、ダットンは、知性と自民族中心主義の因果関係を解説している。確かに、知性が自民族中心主義に影響を及ぼすという仮説は実験的に検証しやすい。その点では、純粋な社会政治学の仮説に匹敵するほどだ。本書のどこが素晴らしいかというと、ダットンの進化に基づいた思考方式を他の行動学の領域に応用してみようという気にさせてくれるという点であり、また、もっと研究してみようという興味を湧き立たせてくれる点である。

現実のエコシステムは弱肉強食の世界であるから、その中で種の存続を図るために、さまざまな特質が重要な役割を果たしている。それはたとえば、気性であり、認知能力であり、肉体的な特徴である。こういう特質は、自民族中心主義に似てはいるが、人種によってその形態が多種多様である。たとえば、アフリカ人は、ヨーロッパ人やアジア人に比べて、暴力に走りやすい傾向がある。米国ではアフリカ系アメリカ人はヨーロッパ系・アジア系に比べて、暴力犯罪に巻き込

---

<sup>4</sup> 金沢聡のリベラリズムの定義が思い出される。「(リベラリズムとは) 遺伝的に自分とはつながらない他人の幸福を願う純粋な好意であり、かつ、そのような赤の他人の福利のために、個人的資源の相当部分を与えてやりたいという真摯な願いのことである」 金沢聡(2012) *The Intelligence Paradox: Why the Intelligent Choice Isn't Always the Smart One*. NY, NY: Wiley

まれる確率をはるかに高い。それとは対照的に、アジア系アメリカ人は、物理学・工学の分野で、人口比で見れば、著しく多数が進出している。同時に否定できないことは、スポーツの分野によっては、アフリカ人男性が上位を独占していることだ。特に短距離走では西アフリカ、長距離走では東アフリカの男性の活躍が目立つ。非生物学的要素、たとえば社会的・経済的な地位なども、行動や肉体的能力に於ける人種的な差異の原因になっているという説も昔から唱えられているが、それだけでは、そのような差異を体系的に説明することは難しい。道徳的に過度になやんだり、他人に責任を転嫁したりしても、科学的な論議をする際には何の役にも立たない。人種的な差異、特に心理的な特質を真剣に討議しようとするならば、潜在的に生物学的に裏付けらるかどかを確認しなければならない。生物学の分野にはポリティカル・コレクトニスという地雷原に踏み込んでしまう分野がある。ダットンは、その領域に大胆に踏み込んだ数少ない学者の一人である。